



十王讚歎修善鈔圖繪

下

ハ 5
3747
3





十王讚嘆修善鈔圖繪卷之下

沙門隆堯爲勸化錄之

七々日の泰山王たてさん本地ほんぢ藥師やくし如來にょらいあり在あと此王
へ詣まゐら道みちよ一の難所なんじよあり此こゝと閻えん鉄處てつじよと名なく遠とほ
あと五百里ごひゃくりのと閻えんと喻たとへん方かた又また夜晝よぢうの
境さかいと知しらど又また其道そのみち極ごくて狭少せうせうのと左ひだり右みぎ北きた岸しづみ皆みな
鉄てつの巖いわより罪人さいにん身みと縮ちぢみ通とほる小岩せういわの角つの鋏せんの如ごと
く少すくくも障さやと身肉しんにくづづくく先まへ進すすみ

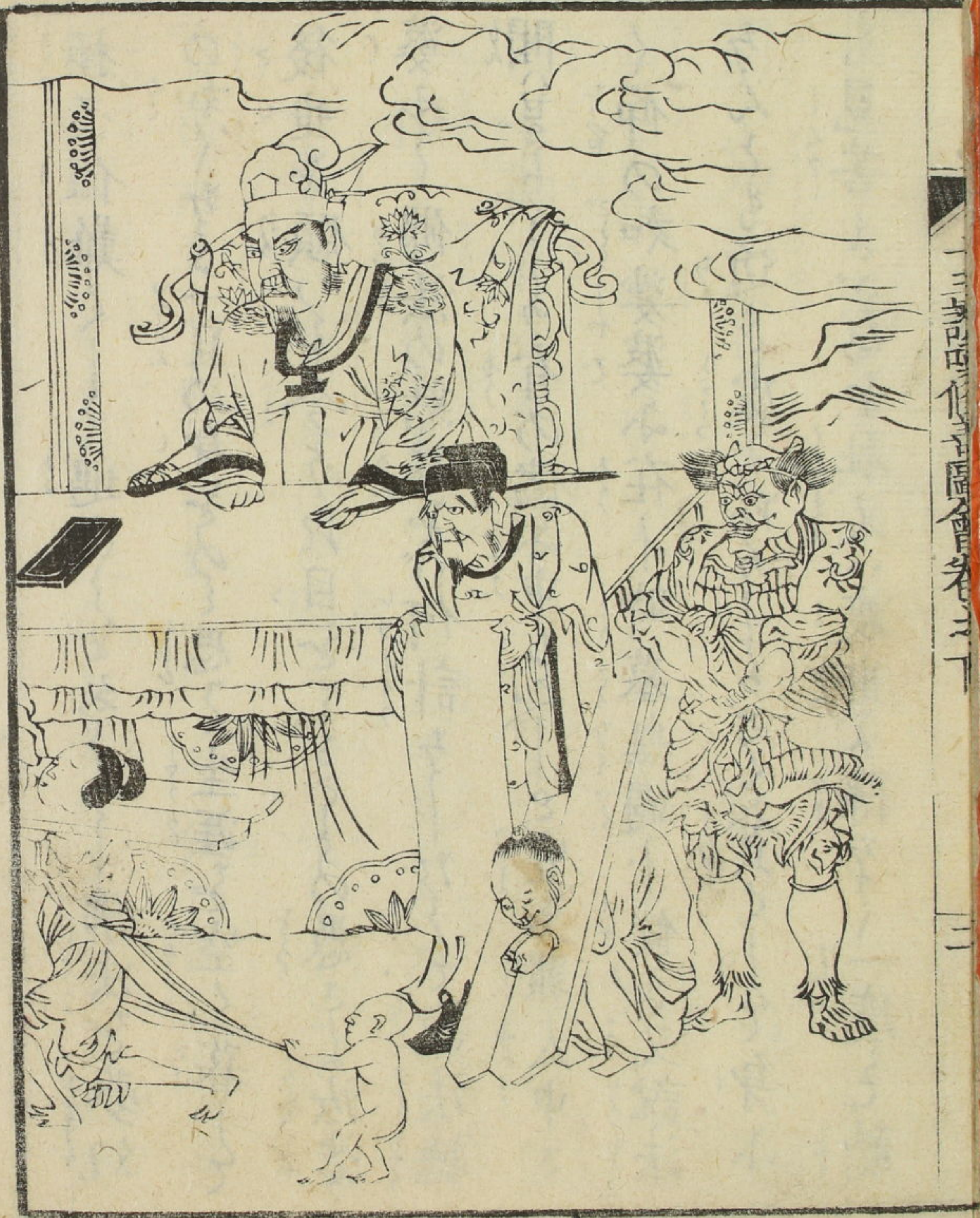
十王讚嘆修善鈔圖繪卷之下

<2019-22>

んこといば品くら合て通ら終と立止まば岩又
開く如此苦を受ること七日七夜あしく初て泰
山王の御前よ參ら又如何かる事と承らんと
怖々御前ふ踏ら即大王罪人と御覽して宣
く儲と汝後生とひと他人の度と思ひや哀我
身の事と八思ざりたるが適人間の生を受るは
盲龜の查ふわつが如しとこや佛に説給ひは
恒沙の宿善よ催され希ふ受たる人身よ猶更

極て値難くく遇ととをめぐり佛法と夢幻
の如くたる一旦の身とを思ふ生涯を空く暮し
後世と願ひど今うれ目とくることの愚は汝婆
婆ゆく佛法の結縁と何計かたを説法聽
聞はざりし有の儘ふ申とと宣ふ罪人申さ
く仰の如娑婆ふ在一時墓無過一候き又説法
かんども近き處よありしと貧くして身小
も見苦きととと耻又渡世よ際を一度と聽

七七日
泰山王



三才圖會卷之十一

聞仕らざる貧究よ生しあつての後悔仕候と
 申せど大王又宣く今汝がらる此所ハ天竺唐土日
 本その外无数の大國小國の罪人あり又十方無
 量の眞官眞衆の集むる處なり汝耻と知れ
 バ此庭とあそ耻べりれ遂小耻と遂とて今此
 處よ面を晒と身の夢幻の人間を見苦しきか
 ら近處の説法とを聞とて空く此處
 還來つてこの諸方れ群集の中少く獄卒を

杖ふ叩く泣居るに世よ見苦しと思はさるや
 此よ過たる耻や有べと宣へど此御語肝銘
 志く耻うに身小餘るりの後悔の泪なり
 見聞集よ七々日ふ太山王福業の定まらる
 本地薬師如來と在や衆病悉除の誓願
 と發し凡夫の病患ふ良薬を施し十二无上の大
 願を立給ふ衆生の重苦を濟給ふれば往生

極樂の志ありて我を憑まん者とは臨終の時ハ
大菩薩を相添て必ど阿弥陀佛の所へ送へり
誓給ふ諸此誓願の意と案どる不邂逅も我ハ
結縁の衆生何れぞ我成就せり東方淨瑠璃世
界ふるや導んての給ふべきと然もして弥陀國へ送
るべしとの給ふハ佛果平等此理をれども其中ハ
超諸佛刹最爲勝と別ていへり然莊嚴の程も思ひ
やうわく貴こそ思ふると然ハ煩し薬師を信ぜ

んようハ直ハ弥陀の願力と憑て名号称念せむハ
大菩薩の引導もくも有べりしれども薬師も喜
給ふべし凡そ其國小生ぜんと思ひ其土の教主の
誓願小願ふが何よ由るの西方ハ往生と願ん
人東方の教主薬師如來ハ祈るべしや唯一筋ハ欲
來生我國者當念我名との給へり弥陀の勅命ハ
信順して徧ハ彼願力と憑專御名と称へり往
生の因と成どるが扱一切の罪人此王の處ハ於

て未來の生所と定らるる依之泰山王の所よ六六の
 鳥居あり即ち地獄餓鬼畜生修羅人天の六
 道よ赴く所の門あり此王委く生處と定給へば
 諸の罪人等向々の生所ふ赴く此鳥居と出れば
 地獄ふ入るべし即ち地獄よ隨一餓鬼城ふ至る
 餘道亦如此故よ殊ふ此所一切の罪人の浮沈の
 さうひかり若跡の追善懃をんを惡處の果を轉
 ぶく善所の生を受く此故ふ諸宗通して四十九日

の佛事と別て懃ふ營をり若追善の力ふ依て生
 處をば不定をんを百箇日の王よ渡をり他力
 回向の家ふ在る中陰等の佛支悉是佛恩報
 謝の經營をんを殊更廣漫よとべん況や父
 母の世間の福田をり佛ハ出世の福田をり故よ
 其の恩徳と知ておまを報ゆると恩を知大
 悲の本也との給へるや唐宋此十一王孝宗
 皇帝の乾道三年ふ豊城の地よ洪水あり依之村

民多く饑ふ及ふ爰は一人の民老たる母と養ひ
 妻ふ二人の児わりて育しよ此難ふ逢て親子五
 人飢と凌べし術なく臨川と云處よ往て世を渡ん
 と思ひ五人連おく往ける道よ川と渡る處有し
 此男妻ふ私言云よハ今世間ふ米穀高直あり
 朝夕を送り難し我家五人口ありハ殊外難義か
 我等もろづ二人の子と負て川と渡るべし汝ハ母
 と捨て後より獨來るべしと云合て先よ渡る跡よ

妻吐息と突扱と顔無夫の惡心世の中ふ親と
 捨る法やある斯老給へる姑と捨る何と足の引
 るへき此より姑と連て外へゆべしと思へども
 流石二人の兒と先へ渡る恩愛も亦捨難く
 姑の手と引く川を渡るが泥の中へ踏込て
 きたる履と失し泥の中へ手を入れて此と尋取
 んとせしが大なる石と覺しよその手ふ當る何
 とぞく取上見よ銀のすろせあり嫁ハ大ふ

喜姑よ見せし我等加様小住馴るる故郷とす
宿移るるも貧苦も逼る他所は吟行
ちと然ふ今此銀と拾多る天の賜あり此
て五人の者の飢を助るかと商賣の元手も
かり申さんさわく子供や夫と連る再故郷
飯らんと勇々川と越岸よ上りては二
人の子供は砂をかぶりて戲遊父は何處かと問へ
黄毛と黒毛と生るる牛が来て唾去

と云妻は驚林の中と尋て見れば早虎は食ひて
血の草しつ汚した骨ぐり地上は亂居とりて
夷堅 小兒は虎と見しあかきと母は班の牛と云つ
志出 妻は早虎をりて悟るが恐るは彼男の心
根滄海却て淺しとる淡と母の恩と忘を捨て
來れと云は虎とるを甚しは不當天心も大惡
人なり故は現ふ天の責とつけて虎の爲小害
とそれ引替妻は人倫の信と失りて姑と助る

故ふ計らひ天より財を賜ふ誠ふ因果應報の明
 なること如此若今此を法よ合せむかの姑ふ喻へ
 未代の我等衆生本覺都と迷ひ出三界生死
 のうね旅よ吟ひ三途の岸ふ捨らむと泣く
 外の事ぞとて而と弥陀大悲の誓願ハ恐多と
 孝心の嫁比如く大願業力の御手とのへ給ひ
 て惡人攝取と捨給ひど安養の故郷よ連飯
 大樂自在の御果報と乞せの給ふと誠小海

山廣大の恩徳を報謝の爲にも稱名懈怠有べ
 らんべ云

百箇日平等王本地觀世音菩薩の在と此王よ
 詣る道よ一の河原あり鉄氷山と名く廣と五百里
 氷水ハ非ど悉厚と鉄の氷なり罪人此渡よ
 赴く小身の寒と五體を縮寄る如く未ど氷
 小觸るふ肉分々切て血流り又寒嵐の氷と吹摧
 音百千の雷比如く罪人氷入らん支と悲とて立

十一 諸國傳書 卷之十

百箇日平等王



三言四語作會卷之十

九

留とどま獄ごく卒そつ後ご呵か責せき云い汝なんぢ惡あく業ごう作つくて眞まこと
 途みち赴おもむ者もの如此ごとく苦くるしみ患あはれ受うることハや知しぬことハ
 有ありし然しかとも恣あま小こ罪ざい業ごう作つくて此この道みち來きりし
 何なんぞ事こと新あらた敷し何なんぞ渡わたることやと責せられて罪つと
 人ひとハ聲こゑを舉あげて叫こゑつつ氷こおりの中なか入いること氷こおりの厚あつさを四よ
 百ひゃく里りあり罪ざい人にんの入いること待まちて氷こおり即すなはち破やぶれし閉と
 塞ふさぐことたと寒さむいことならず氷こおりの身み破やぶること如ごとくく刃やいばの如ごとく
 何なんぞ大おほ苦くるしみ難がたを經へること百ひゃく箇ご日にちの平ひら等とう王おうの御ご前ぜん小

參まること大おほ王おう宣のたまはれること汝なんぢ此この處ところ來きりし人ひとの導みち導みち非たがひし
 己おのれが心こゝろ引ひきつちら其その故ゆゑハ汝なんぢ娑しあ婆は小こ在ありし時とき風かぜ
 前まへの燈あかり水みづ上うへの泡うぶの如ごとく身みと持もちて眼まなこ前まへを无な
 常じょうを見みることも只ただ人ひとのあら見みをして老らう少せう不ふ定ていの
 境さかいと知しること眼まなこ前まへに子こと死しをして妻つま後ごろ次つぎ第だ相あ違ひ
 の別わかれし驚おどろきし千ち年ねん万まん年ねんと保たもつことや心こゝろを
 財さい寶ほうハ有ありし猶なほ積た重かさ移うつること支しのと嗜たのむこと
 无な常じょうの殺ころ鬼おに此この時ときと嫌きらむこと理ことわりとも思おもはれること徒たがひし

狂言綺語の戯は高笑して思ふやがふ過せし
酔ぞう楽は苦の因苦は樂の因と云々と知ど
や汝此まづ先々の王を詞めと定て聞つらん今
云う甲斐やれ事かどと何と受難き南洋
の人身を受かぐ佛道修行ハせりしを汝愚
痴せん戒定惠の三學ふ於るハ修行せりし
理あり然る彌陀の本願ハ罪業深重の輩此而も
一文不通して外は助る便なき者まを

徧彌陀の願力を憑て名号と称念せん必
來迎し給ふかふる目出度法小値ちり遇ぶ如
く日と送る又候珍しかり我前小來る六の無
顔さう且ハ慈と且ハ辱し給ふぞ打らうの
ら心地と後悔の涙と増ふれ今憑じ
方とハ娑婆の追善とらりけりも左の思ふ
らん一樹の蔭一河の流と汲たも多生の縁とや
云われ増て况や親と成子と成夫と成妻と

何計の契ぞや彼丁蘭が母の木像ふ仕しも張敷が
 扇と身小副しと孝行の深き故とて就中外典
 小父の尊親の義を兼たりと云て父の恩と重
 ととれどと内典小説母恩不能盡と説せ給ひ
 母の恩と重しと其故先づ母の胎内よ處とること
 最初犍羅邏の一滴より出胎の期に至りて二十八
 轉の間坐卧も安らげず母と苦しめ夏幾ぞや
 日と數りば二百六十六日月と計りて九月の程あり

況や胎外よ生れし咽苦吐甘迴乾就濕かる
 厚恩と頂し身の徒らふ月日を送りて自身を
 空く三塗よ沈み後世を勧めて父母よ勸もせ
 剩しづ身小引しと造るまづ罪中て造せ
 て父母より重苦と受しのも其と吊んと思ふ
 志もくばた形もろ人よ似て畜生よ同らふ
 諸天豈憎と給はざらんや況や又其苦小沈めりも
 多くハ子と思ふ恩愛より起り罪ぞ多しと

何ぞ没後の孝養と思ふらんや偕ふと大聖世尊
も切利天めして安居九十日報恩經と説給ひ
御母の恩と報給ひ支上よ述が如く大聖ふ
を然る況や凡夫とや

見聞集ふ百箇日よ平等王枷櫛を副て
苦惱をまよと云へり偕此王は本地觀世音菩薩よ
ち等覺无垢の居士入重玄門の薩埵たり然れ
ば三世常恒の利益廣大なりて形と二十三身

變じ法を十九種小設給へり然間上は有頂の頂
より下阿鼻大城に至るまで普く胎卵濕化を
四生小隨ひ強く眞と頭との利益を施し給ふ
こと經小の衆生若聞名離苦得解脱亦遊戯
地獄大悲代受苦と説給へり實は慈悲利生の
深きなり此菩薩小如いなり其由を尋るふ此菩
薩は阿弥陀如來の左邊に脇士なりて弥陀の悲
智二門の中慈悲の方と司り給ひ衆生の苦

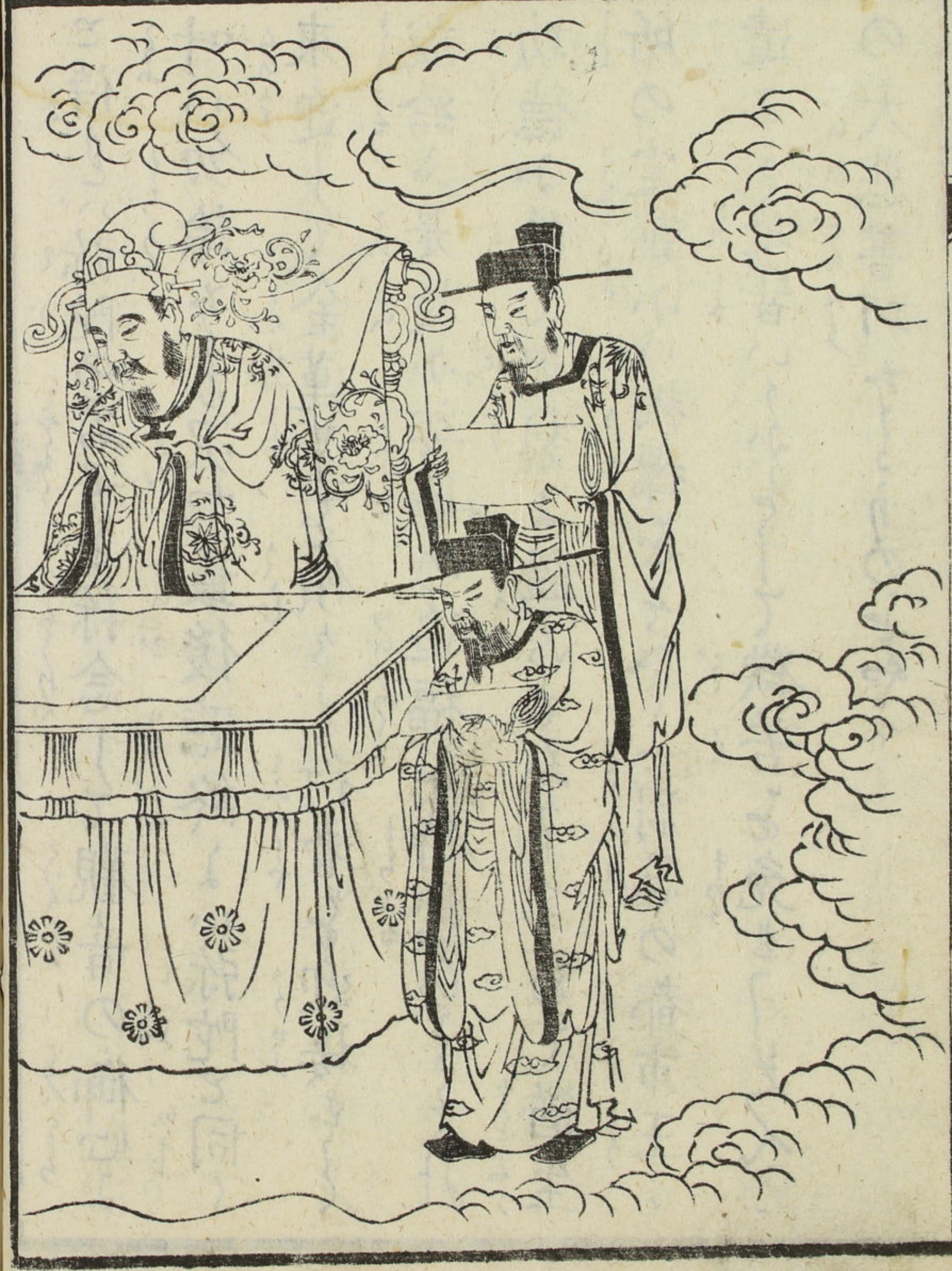
とめく樂を與人と誓給へうぐ故り此菩薩ハ弥
 陀小親ふくれ訣在と云何と云ハ弥陀と觀
 音とい因位の昔ハ親子なる旨と經小説たまひ
 佛果の今ハ師弟より眞小はけ俗ふつ者一體分
 身と申とふ其所由あり去れど寶冠小弥陀
 と頂と給ふと師孝報恩の爲りて抑又
 衆生として恩を知りめんが爲り依之經ハ
 至心称念我名号但應專念我本師阿弥陀佛

と侍ハ弥陀の名号と称念して觀音の御心よ
 叶ハ勿論なり況や最後臨終ハ弥陀と同く
 來迎して金蓮臺を傾く々行者と迎接とて
 説給ふ是故ハ娑婆の追福と待給ひくそ此
 功德小依て泥梨ニ墮ちてふりしめて猶生
 所の定難小ハ枷櫛とそそへ一周忌の都市王ノ
 遣さる是皆いふとして獄苦を免れしめん
 の大悲善巧なるものや

一周忌
都市王の廳



十正海原渡文多善圖會百のり
十一



十正海原渡文多善圖會百のり
十一

一周忌都市王ハ本地大勢至菩薩がま在まと
罪人さいにんハの王おうハ前まへハ跪ひざまづと涙なみだを流ながして申まをと是これ
中なかにで參候道まいるまじりすう種々の苦くるしみと堪たかかく覺おぼへ候まを
今いまハ於おてハいりまと身みの罪業ざいごうハ報果ほうくわハあやうハ存ぞん
候まを若ごとまま報殘ほうざんハ候まをと一向いっけうハ御慈悲ごじひを以もて
御免ごめんかり下くださしと歎なげと申まをと其時そのとき大王だいおうの
給たまはは汝なんぢが罪業ざいごうすまハ盡つくまと此處このところハ來きらるべしと
所由いとしハ然しかハ己おのれハ來きと以もて知しるまハいままハ盡つくまと

云事いふことを詮せんどる處ところ汝なんぢが業障ごうじやう盡つくまと分わかるま
明あきらか知しる箱はこあり若ごと罪業ざいごう々々ハ彼あつ光明くわうめいの箱はこを
開ひらくべしと箱はこを數多あま取出とりて罪人ざいにんの前まへハ並ならべ
置お給たまへハ獄卒ごくそつ共ともハ例れいの諾だくを以もて呵責かさくして早々はや此
箱はこと開ひらべし汝なんぢが罪業ざいごうの有無あハ只ただ今いま明あきらか分わかるべしと
責せらると怖おそハい限かぎをあけし何なにを開ひらていつまハあらんや
恐おそハい續つぐと爲なる方かたありて泣な々々ハ一ひとの箱はこと開ひらき
忽たちち中なかにより猛火まうかと出いでし罪人ざいにんの身みふらるま

其時鬼共口々そのときとくわいをくわいいくわいふくわいとくわい云敢くわいどくわい打叩くわいえくわいとくわい限くわい

一罪人ざいじんそのその數かずとと知しぞぞこのこのゆゆへへよよ

見聞集けんもんじふふふ一いち周忌しゅうきふふ都市王としおう罪人ざいじん群集ぐんじふしてしてささらら

んんちちるる市しのの如ごとくくととへへりり然しかるるよよ去このの王おうハハ本地ほんち大勢だいせい

至菩薩しぼさつふふ是亦これまた弥陀みだ如來にょらいのの右脇みぎわきハハ大士だいしありありて

弥陀みだ如來にょらいのの智惠ちゑとと司給すしきつひひくく來迎らいおう引接いんせつの時ときハ

ハハ觀音くわんおん蓮臺れんたいととくく一いちハハ勢至せいしのの頭かみとと摩給まきつ

ふふ去こりりハハ首楞嚴しゆらうげん經きやうハハ勢至せいしのの發願はつげんとと説給せつきつふふ

我本われほん因地いちぢ以念佛いねんぶつ心しん入いれ无生忍むじゆじん今いま於お此界このかみ攝念佛しやくねんぶつ入いれ

飯淨土いひじゆんちゆととののととままふふううくく貴方あなたもも念佛ねんぶつ三昧さんまいハハ依よて

無生忍むじゆじんととままふふううとと宣のたまふふ此故このゆゑハハ今いま又また念佛ねんぶつのの人ひとと

攝しやくしてして西方さいほうのの極樂ごくらくハハ飯いひららんんとと誓給ちかひきつへへりり今いま思おもひ

合あははるるハハ彼黑谷かろくこくの上のうへ人ひとハハ勢至せいし菩薩ぼさつのの化身けしんハ

ままろろくく淨土じゆんちゆのの宗義しゆぎとと建た立たてた給きつひひ濁惡じやくあく不ふ善ぜんのの衆しゆ

生なまとと勸すすめてめて本願ほんげん名号なごうのの功能くわんのうとと弘ひろめめ給きつひひ往むか生なま日ひ已ま

來き空くう也や惠心ゑしん永觀えいくわん珍海ちんかい等とうのの先達せんたつハハ念ねん佛ぶつを

弘通一給ふ云へとも化導未普めども爰
 小源空上人泰かくも美作國久米南條稻
 岡の莊小誕生在や一時二の幡天より降り
 權化の奇瑞を現し生年十五歳の春初て比
 枝山小登り給ひ天口の法門を學して一心三
 觀の月と翫ひ三諦一理を花と折給ひりど
 も出離の志至りて深く在りて猶閑居の極
 と尋て十八歳の秋永山門の交衆をや入て黒

谷小蟄居一給ふ其後一切經と披き給ふ夏五返
 ちりその外諸宗の章疏和漢を傳記何の手小
 され眼小あり給はざる所ゆらんや是故小世擧て
 智惠第一の法然房と稱しり雖然是等分
 濟の智惠と以て正しく生死と出離とを理
 か一とく即ち善導大師の釈義と指南らて
 速小彌陀超世の悲願小皈一年來修學の聖
 道門と掩て徧し争士門小入り西方願生の安

心と決得^{くまつ}ろ^くま^くみ^く然^{しか}つ^くとい^いつ^くと^く濟^{さい}度^ど利^り生^{せい}の
 心^{こころ}小^こ催^{かほ}ふ^くて^く黒^{くろ}谷^やと^く出^で給^{たま}ひ^く終^{つひ}ふ^く吉^{きち}水^{みづ}小^こ住^ぢ一^{いち}
 給^{たま}ひ^く四^し遠^{えん}の^く衆^{しゆ}生^{じやう}を^く誘^いて^く一^{いつ}向^{かう}の^く專^{せん}修^{じゆ}念^{ねん}佛^{ぶつ}を^く弘^{くわ}
 通^{つう}在^{ざい}や^く上^{じやう}十^{じゆ}善^{ぜん}の^く帝^{てい}と^く始^{はじめ}た^てま^くつ^く下^げ八^{はつ}田^{でん}
 夫^ぶ野^や婢^びふ^く至^{いた}ま^く貴^き賤^{けん}上^{じやう}下^げ道^{だう}俗^{じやく}男^{なん}女^{にょ}悉^{しつ}く^く其^{その}
 化^けと^く仰^{おほ}み^く風^{かぜ}小^こ靡^みく^く草^{くさ}れ^く如^{ごと}く^く如^{ごと}く^く自^じ行^{ぎやう}化^け
 他^た功^{こう}畢^ひて^く終^{つひ}ふ^く建^{けん}曆^{りやく}二^に年^{ねん}の^く春^{はる}化^けと^く東^{とう}山^{さん}の^く草^{くさ}菴^{あん}
 止^とめ^く心^{こころ}と^く西^{さい}刹^{しやく}の^く華^け臺^{たい}小^こ移^{うつ}一^{いつ}給^{たま}ひ^く一^{いつ}已^{おの}來^り流^{りゅう}と

汲^くひ^く學^{がく}徒^と本^{ほん}源^{げん}と^く尋^{たづ}ね^くの^く道^{だう}俗^{じやく}今^{いま}小^こ至^{いた}ま^く一^{いつ}心^{しん}
 稱^{しょう}名^{めい}の^く安^{あん}心^{しん}ゆ^くら^く得^{とく}生^{じやう}の^く益^{やく}疑^ぎあ^くる^くは^く
 是^{これ}豈^あ誰^{たれ}が^く力^{ちから}ぞ^くや^く唯^{ただ}是^{これ}法^{はふ}然^{ぜん}上^{じやう}人^{にん}の^く厚^{こう}恩^{おん}勢^{せい}至^{いた}
 菩^ぼ薩^{さつ}の^く大^{だい}悲^ひち^くり^くれ^く彼^か上^{じやう}人^{にん}の^く弘^{くわ}通^{つう}一^{いつ}給^{たま}ふ
 淨^{じやう}土^ど門^{もん}他^た力^{ちから}本^{ほん}願^{げん}の^く趣^{すい}ハ^く一^{いつ}切^{せつ}善^{ぜん}惡^{あく}此^{こゝ}凡^{ぼん}夫^ぶ人^{にん}往^{じやう}
 生^{じやう}極^{ごく}樂^{らく}の^く志^しあ^くる^く人^{にん}ハ^く深^{ふか}く^く弥^み陀^たの^く願^{げん}力^{ちから}と^く信^{しん}じ^く
 我^{われ}を^く念^{ねん}ト^く我^{われ}名^なを^く唱^{とな}へ^くる^く若^{ごと}我^{われ}國^{こく}小^こ生^{じやう}せ^くと^く
 正^{しやう}覺^{かく}取^とら^くと^く誓^{ちか}給^{たま}ひ^く法^{はふ}藏^{ざう}菩^ぼ薩^{さつ}今^{いま}と^くく^く正^{しやう}

覺と成して西方の淨土の稱念を行行者と
待給ふ然らば本誓の重願虚かしく稱念の
衆生何ぞ往生疑あるんやとて正しく法語を
宣く他方とつゝい喻へば源空ハ云ふ甲斐あ
かり邊國の土民のて全く昇殿とて身よハ
あつざんとして上より召さされ二度殿上へ
参りて是併ながら上御力を以ての定極
重惡人無他方便の凡夫ハ曾て報身報土の極

樂世界に參るべき身よハ非絲ども阿弥陀佛を
勅命たりとて稱名の本願を報て來迎を預け
んとして何の疑あるべし我身の罪重く無智の
者ち自ら争う往生と遂んやと疑あべし左
様小疑ん者はいまも佛の願を知る者なり如
此の罪人と濟ん為の本願を此名号を稱へば
かゝ努々疑ふと有べし十方衆生の願
の中小有智無智有罪无罪善人惡人持戒破

三十三卷長卷三十一

三十一

戒男子女人乃至三寶滅盡の後此百歳の間の
衆生もどくと漏れどけり彼三寶滅盡は時の
衆生ハ命の長と八十歳より戒定恵三學
その名もどくも聞どけり此等の衆生まで
も念佛せむ來迎よ預かぐべしと知かぐ我
身の捨らるる様をばいりて案出とせむ
やた極樂の願かぐ念佛の申とれどん
れもて往生の障とハたせむと相構て願往生の

心あしく念佛と相續とせむとけり我力あしく思
寄もどけり罪人の念佛する故よ本願ふ乗して
極樂ふ參ると他力の願とせむ超世は願とせむ
ゆかり案内と知どけり人の機を疑て往生と
せむとけり道心者智者かんの念佛はて往生
ハ給あめ明暮罪とのと作りて一文字とせむ
も知どけん者ハ念佛申とせむと往生不定かりと
思ふ者ハ本願ハ善惡の機を兼て發給へり

一三寶滅盡の間の衆生

と云あくと知ぬ人なり先世の業に依て生れり
 身とバ今生の中よハ改ちをいと出と叶はれ女
 人の男子ふちりやと思へども今生の中よハ
 叶はらざるが如し念佛に機ハ唯生付の儘にて申
 す也智者ハ智者とて申さるる生も愚者ハ愚者
 ありて申して生も道心ある人も申して生も
 道心なれ人も申して生も乃至富貴の者と
 貧賤の者も慈悲なれ者も欲深き者も腹悪

と者と本願の不思議あり念佛たるとも申せど
 何をも往生すなり念佛の一願は萬機と撮て
 發し給へる本願なればたゞみごとく機の沙汰
 とせど一向念佛たるとも申せど皆悉く往
 生するなりと念ふ念佛往生の義を深くも難
 くも申さん人とばはやく本願の理と知らる
 人と心うへも也浄土一宗の諸宗も超へ念佛
 の一行の諸行は勝るなりといふ万機と撮て

十三諸行修善圖會卷之四

五

方と云ちり理觀發菩提心讀誦大乘眞言止
觀等何れも佛法の疎ふかりはつて非を行
者の不法を依て機が及ぬかり念佛門に
至るは時といへば末法万年の後人壽十歳小
つまら罪といへば十惡五逆の罪人老少男女
の輩一念十念の類に至るまで皆是攝取不捨の
誓ふ六の是故は諸宗小起諸行は勝たり
しハ申と也己上禪勝房よ又のこまり本願よハ

惡人を嫌はれど好で惡業を造るは是佛の弟
子小非ど一切の佛法は惡を制せどと云ふは
制つてとて叶はば禁じられども止むる者ハ念
佛して其罪を滅せしめて勸たると佛の慈悲の
普ふは法聞て罪をばたて造りて思食と云悟を
けさば佛は慈悲は漏ぬべし捨給くの本願と聞
んぬも増て善人をばいふと悦び給んぬと
思ふべしあり一念十念とて迎へたまふと聞バ況

百念千念とや思ひく心の及び身のしげん
ん程ハ勵べ
已上十二箇條 問答のあはれと此等の文ハ總て是
淨土一宗の大意念佛行者の目足なり冀く
ハ此と見聞せん人々ハ自他宗ハ限らば末代の
時機をかぐとて永欣淨厭穢の妙術を領得
するは指南ととべ一偈もかの勢至菩薩鎮よ三
途と栖とく重苦の衆生と濟ひ給ふと大
悲の至て骨を摧くも報難とものも故

寶積經ハ我能堪忍度諸惡趣未度衆生と説
給ひまて觀經ハ以智慧光普照一切令離三
塗得无上力是故号此菩薩名大勢至と説給ふ
惡趣の衆生と救給ふと餘の菩薩ハ勝給へり
然と今罪人と呵責したる御心の中とを御
慈悲と淡くおりの然と業因感果の
道理ハ誠たやも亦理あり時ハ大王の給り
汝先々の王ハ所より地獄ハ墮べりりと娑婆

追善の有ふ依て此まで免と來れり實は
 汝ハ我身と思はざる不當の者かまどと妻子
 孝養の者共かり此一周忌の佛事と營ふ依て
 又第三年の王ふ送とべりと下知したまへ鬼共
 請取て眇々たる三箇年此旅よ赴く道とぐ
 の苦しと忍び難しと説給はり

第三年五道轉輪王ハ本地阿弥陀如來ふ
 在と此王ハ是やぐの王ふハ似給はど御願ふ慈

三回忌 五道轉輪王



三言四行集卷之十

三十五



一三層業火の苦圖可なり



無間地獄の畧圖

一三層業火の苦圖可なり

悲の色とふくく御形柔輭めく愛敬の相在
 ことば先罪人ふ向くの給りく汝が心く此
 處ふ來とく云ちく左ふその後悔くく道
 すがりの苦く身心を惱まして此く來とく
 出との無慙くく娑婆めく少ふてと善根
 のあはばく地獄も落どして此處までら
 來くく若三年の追善とと送るやうに
 速く善處よ遣とべると宣へて罪人御詞と承

くり少く慰心地く即ら申く上るやう今迄
 處々の大王此御前ふくは是程の御詞の御情
 ふと預申く此仰誠よ有難覺候仰願くハ
 地獄と御免下され大王の御慈悲と以て囚
 人とて置と下と終く是まで處々の大王
 の御前ふ囚人多様子と見候く誠よ浦山
 敷存ト候ひくと其時大王誠ふ不便よハ思へども
 理をくして行はる斷罪をり彼等ハ皆其王

くの助たすけ預あづかるべと結縁くわん縁の者ものなり汝なんぢハ左様さやうの縁縁
 もぢぢれれも囚人めいじんの義ぎハ叶なぐらず然びんとど
 娑婆しあはの追福ついきふくも有あらずと速すみ小善所せうぜんじよよ遣つかとと
 一若しやくままと吊つりものももかかと時ときハ渡わたととと方かたももか
 ちちももハ此こゝししりりを地獄ぢやくの外がわ小遣つつかととと處ところか
 我われ汝なんぢと哀あはれれ惜あはれれとと自業自得じやくじとくの道理だうりををれれ
 力ちから及およぶぶとと歎なげせせ給たまふ御氣色ごきしよ少せうて青衣せいゑの
 俱生神くじやうじんと召めいて罪人ざいじんととむむととめめとと且かつく魂たま宿樹しゆくじゆ

云木うゑきの下かたふふちちううめて娑婆しあはのありありは故郷こきやうの
 妻子さいし追福ついきふくととかかやや否いなやと見みせせと仰おほせせバ
 かの魂たま宿樹しゆくじゆの下かた小連行せうれんぎやう給たまひひ故郷こきやうととせせ
 む然も小鴛鴦せうゑんゑうの衾かみと並ならべべ男女なんにやハ或あるハ後妻ごさいとと嫌きら
 或あるハ他た夫おつとハ再嫁さいけあして契ちぎと改あらめめ笑わら娛あそむむ憑たの
 小思おしひひ子こや孫まごハ徒ただハ自じ分の欲ほふふやや罪つみ
 のの作つく財寶ざいほうと惜あはれれんで訪まりりどど此こゝ時とき罪人ざいじん
 ハ娑婆しあはの妻子さいしと恨うらみみ自身みづかの業報ごうほうと悔くやとと黄

たらし涙とをぐー血の汗とを流ととあり若此時は
 罪業と滅せざるはけわふ地獄はたけやの
 苦惱云べうぐ依之大王罪人ふ語りて曰
 凡そ今もむの苦い地獄の若は並ぶとい大海
 の一滴の如し汝正ふ彼地獄の苦患を受ん時
 いふととぐや地獄の有とも荒々語て聞て
 一凡そ先八大地獄とく八の大地獄あり所謂
 一よい等活二よい黒繩三よい衆合四よい叫喚五よ

大叫喚六よ焦熱七よ大焦熱八よ無間あり一々
 の地獄小各十六の別處あり合て二百三十六の
 地獄あり此八の地獄は初の等活地獄よりして
 下次第小重なるをり然も無間ハ最下ふあり
 始の等活地獄は此人間界より下一千由旬よ
 あけ縦横一万由旬あり其中の罪人互よ害心と
 懷て若たましく罪人同士出合時ハ獵師の鹿よ
 逢くる如くりて各鉄の爪と以て互よ抓裂肉

血もいづれいつとてたゞ残るもの骨ぐらゐり
或ハ鉄の臼よ入て鉄の杵ふく此と擣く或ち
涌上る銅の湯中入て煮る多にその中よ
身の沈みと重き石の如とり又浮上て手
とあけ天よ向く号哭する者もあり或ハ大
ちり鉄の串と以て後門より頭ハ貫き徹して
鉄機の上ふく打返る此と炙る或ハ常ハ猛火
の中ハ在て焦る其外の苦相具よ述る

能ど此地獄の火と人間の火と比ば人間の火ハ
雪の如く又ハの地獄ハ火と次第ハ下の地
獄ハ比ぶと此獄火ハ雪の如く又此地獄
の壽命ハ五百歳なり但この地獄の一日一夜ハ
人間の九百万年ハ當る然ハ其五百歳ハ人間
の無量万歳と云べし其次々の獄苦次第ハ上
小増るおと各十倍ハ重受く壽命も亦
爾ちり其一々の苦相具よ述るおと能ど

思ひやぐべー次ふ無間地獄の有様又鹿々語
て聞とべー無間とい大焦熱地獄の下ふ在
地と去ること一万五千由旬をり先中有
て彼地獄の罪人の叫ぶ聲ととくふと即ら
悶絶と頭面は下ふ在る足は上よ在て矢と射
が如くふーと二千年とへく下ふ向て行く彼阿
鼻地獄の縦横正等して八万由旬をり七重
の鉄の城は七重の鉄の網ととり下ふ十八の隔

あり四の角ふ四の銅を狗あり身の長四十由
旬をり眼は電の如く牙は鋸の如く齒は刀山の
如く舌は鉄刺の如く一切の毛吼より猛火を出
と其烟は臭とと世間よ喩る物あり亦十八
の獄卒あり頭は羅刹の如く口は夜叉の如く
六十四の眼あり釣牙上さまふ出たこと高
四由をり牙の頭より火流て阿鼻城は満頭
上ふ八の牛頭あり一一の牛頭は十八の角あり

一一の角の頭より悉く猛火を出せ又四門の
間上よ八十の釜あり銅の湯沸出て亦城の
中小満一々の隔の間よ八万四千は鉄の罽大
蛇ありて毒を吐と火を吐て身ハ城中小満その
蛇吼る時百千の雷を如又黒くして肥たる蛇あ
る罪人と違く足の甲より始て漸々小齧食或ハ
熱鉄の鉛を以て口と鉛て開くの洋銅の湯と
その口入る小喉及び口と焼て府藏と徹して下よ

て出づ或は炎の刀を以て一切の身の皮を剥く
涌る銅の湯と其身小蛇や或は猛く盛なる
火有て炎をわけ来て皮を穿肉よ入る
骨を焦し髓を徹して跖より頂よ出るよと脂
燭の如く罪人の身の中火を燃ゆる所ハ針
穴やどとや故無間地獄と名く其外を
苦相ありて述難前七の地獄及び別所
の一切の苦を以て一分とて阿鼻地獄ハ一

千倍せんばいといれり如此無量の大苦このむねのひりやうを受まて即まち一ま日いち一夜いちやの人間にんげんの六十ろくじゅう小劫せうごうは當あら又一切またいっせつの罪ざい人已にんぢが一身いつしん悉ことごとく阿鼻城あびじやうは滿みて間まをひまとおもへ
依よ之これ亦無間またむかんと名なく六むの地獄ぢごくの人ひとはたいしやう大焦熱たいしやうねつ
地獄ぢごくの罪人ざいじんと見みふと他化自在天たけにざいぜんてん所ところといふ
かあぶく此阿鼻地獄このあびぢごくの苦相くるさうは千分せんぶんり中ちゆう小せう一いつ
分ぶんを説盡せつじんべいといふと喻ゆほくといふとべいといふと若し汝なんぢ娑しや
婆は在あり一時佛語いつしふごと信しんどうといふとのをくはぶ具は此つぎ

無間むかんの苦くるを説せつば忽たちまち血ちを吐くと死しといふと程ほどの
事ことをり若し六むの地獄ぢごくはちゆう墮たといふと即まちちゆう一百二十ひゃくにじゅう
六むの地獄ぢごくを悉ことごとく經歷きんれいといふと汝なんぢその時ときは苦患くるげん
といふといふべいといふとといふと語給ごじゆへは罪人ざいじん委まく聞畢きんぺいて
怖畏ふゐといふとること限かぎをり其時そのとき大王たいわう宣のたまはん汝今なんぢいま地獄ぢごく
の苦相くるさうを聞きふといふと怖畏ふゐといふと正ただしく地獄ぢごくの火ひは
燒やんと乾かわたる薪しんを燒やが如ごとくちゆうんとや是これ
火ひの燒やは非あら即まち惡業あくごうの燒やをり火ひの燒やハ滅けす

つゞき悪業の焼滅ややくめべうす如此重苦くわうぢゆうくを受る
 あしたる汝なんぢが一心いっしんより起おこしり憑たもとも憑たもをたもた
 心こころをこころに妻子さいしの追福ついきふかりその上うへ没後ぼつごの追善つぜん
 七分しちぶんの一いちととたそ受うと縦令待じゆじやうまちあありしと争いう
 獄苦ごくを免まぬらんここと叶なべうす命いのちの中なか小悔せうかいと
 志し今いま至いたて後悔こうかいすと何なんの及およぶ所ところあり
 んやんカかケけ地獄ぢごく小遣せうせんととるままと沙婆女しゃわにょの
 追善つぜんああるのの乃すなはちちそそれ勝劣しょうりやくよ依よててそそれれく

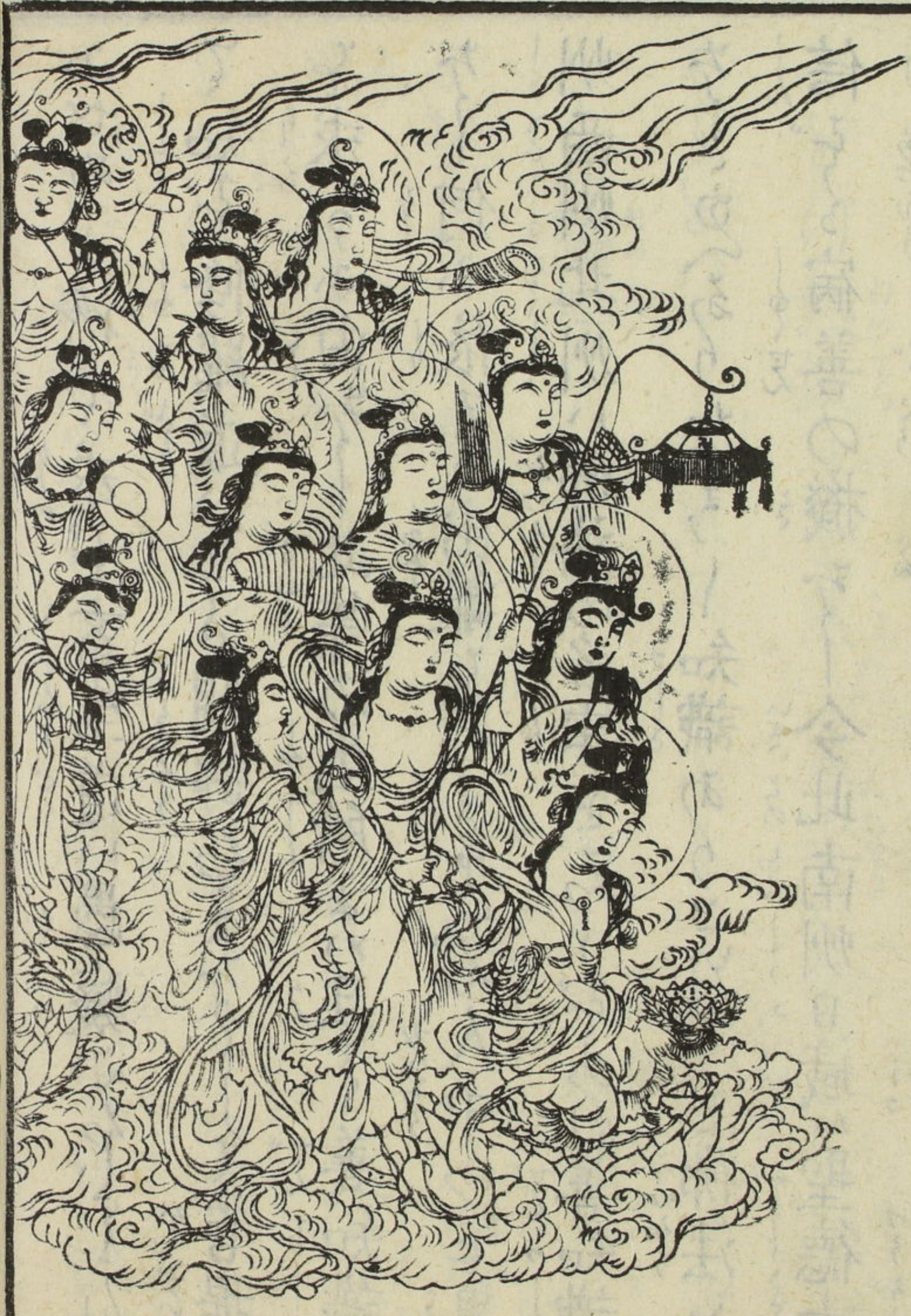
の生所なまところふ赴おもむけたたは是こゝゆゆの
 見聞集けんもんしゆ小せう第三年だいさんねんのの五道ごだう轉輪王てんりんおうははと千せん
 日ひののううららふふああががちちふふ福ふくとと二界にがいの外ほかふふりりひ
 青衣せいゑのの俱生神くしやうじんとと以もて罪人ざいじんととああををああわわくくああびび
 く魂たま病やま華はれれととふふて志しづづく古郷こきやうととううせせいいひ
 契ちぎとと結むすぶぶ男女なんによいいととぶぶと改あらめめく我われととつつととれ憑たも
 をかけを子孫しそんハハ罪つみと造つくて吊つりぶぶと娑婆しゃわの妻子さいし
 と恨うらみみ自身みづかみ罪報つみほうををくくるる黄きををるる涙なみだととりり血ちの

汗あせと流ながと此時このとき罪業ざいごふと滅めつせざればはめふ奈梨なれ
 ふとりの熱鉄身ねつてつしんを焦こし寒氷くわんひやうくびをともら融銅ゆうどう
 ともとのつゝ生革しやうかくかゝらふまのつふ銅柱どうちゆうまをとい
 ぐれた熱地ねつちこれよふと然しかもバ即ち寒氷くわんひやう熱火ねつかの底
 小おちづて華池けち寶閣ほうかくの中うち登のぼるふと此時このときよ
 非あどバやゝ何なんもの生しやうもる期きせんひとくび人身じんしん
 と失うしなひつとバ万劫まんごうふもかへらげ天上てんじやうハ樂らくふ誇こほ
 て厭いとど地獄ぢごくハ苦くと悲かなとて願ねがど餓鬼道がきだうハ飢饉きん

ふせめし後のち々々求もとむ畜生道しよくしやうだうハ愚癡ぐちふやとれ
 て知しど修羅道しゆらだうハまゝ闘諍とうしやうもまをくして菩提ぼだい
 を求もとむ小由せうゆかゝ此等このらうの生所しやうじよハ且かつく善知識ぜんちしき
 ち何なに小依せういてり出離しゆぢをつとまへん人中じんちゆう中ちゆう少せうと東
 州しゆうしゆう西州しゆうしゆう北州ほくしゆうハ佛法ぶつぽふの名字ななふととるどまれ善知識ぜんちしき
 をとまへありたまゝ知識ちしきありといへばと佛法ぶつぽふと
 信しんど宿善しゆくぜんの機きかゝ今いま此南州このなんしゆう日域にちいきハ聖徳せいとく太
 子し佛法ぶつぽふと弘興くわんきやうし給たまひりりまめく外がハ教法けうがふ

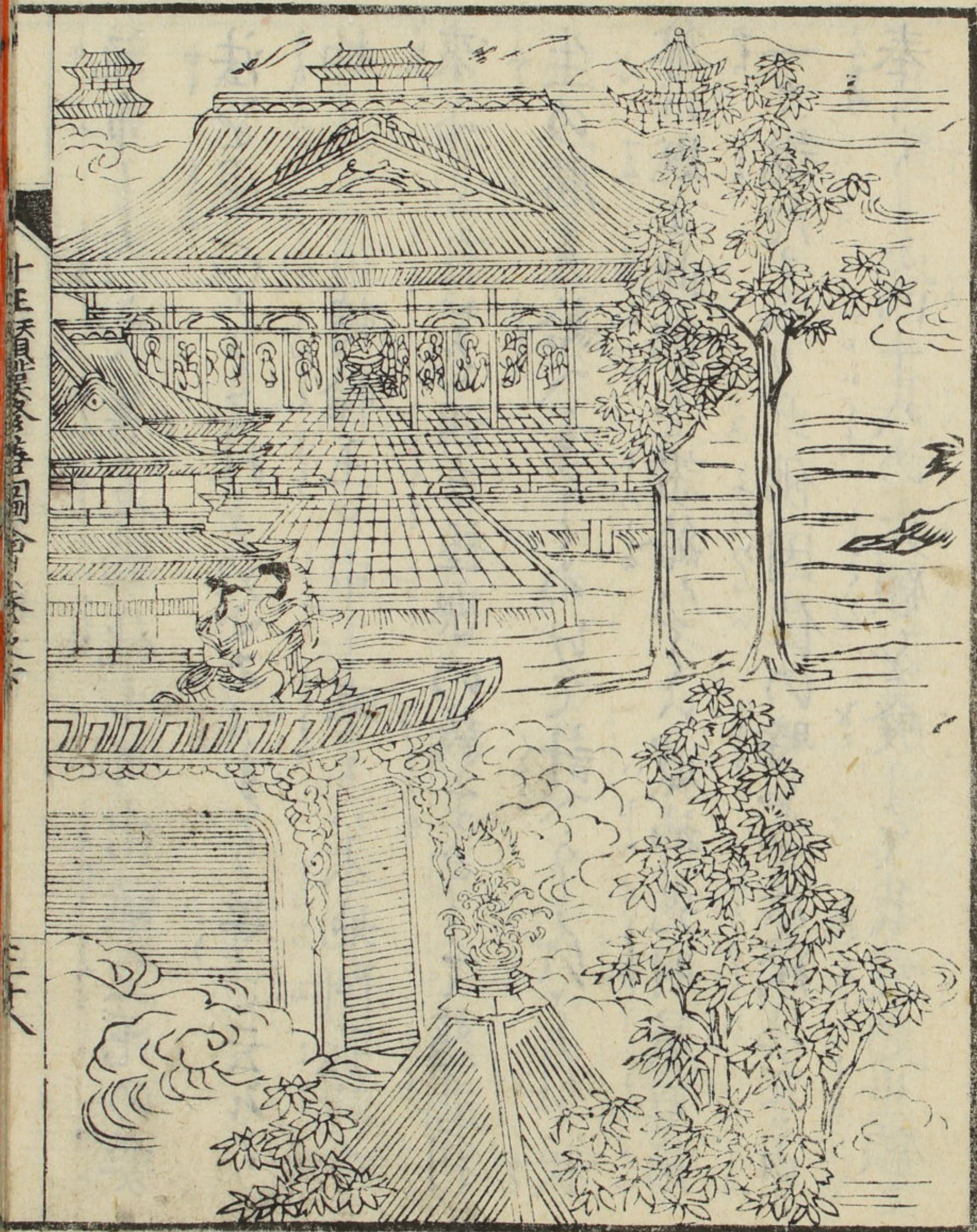


三十五卷之三十一



三十五卷之三十一

三十一



十五天眞聖母聖母圖會卷之六



十三天眞聖母聖母圖會卷之六

三十七

流布一内小善友勸化して出離生死の要
 法を求んふくこれと云ふあり等と云るなり
 抑此五道轉輪王と申し奉るハ本地阿弥陀如
 來あり在る西方極樂の教主として慈悲利
 生の勝を給へるこゝわけて計べうべしんを釈
 尊ハ既よ此佛を讚給ひく威神光明最尊第
 一と説たまへり此佛因位の時と云法藏比丘と申
 奉るハ四十八の大願を發して我建超世願と

自證し給ふ其所由ハ二世の諸佛ふ捨らる九方
 の淨土ふ嫌はるる五障の女人五逆謗法衆
 生をと捨給はざりて忝ぢくも惡業の衆生を
 愍みより彼衆生ふ代て其苦と受人衆生だ
 かも助るなりと我身と云假令諸の苦毒の中
 小止むと忍ん終悔る心あり若此願叶
 ば永劫を運と云るも天上正覺と成とべう
 すとも誓給ひるその御志の切なる酔

其願一々小成就して既小正覺をわたり給ひくより
已來凡そ十劫を経給へり然バ本願を憑とかく
る人往生せしむること一依之弥陀に我建超
世願と名のり給ひ釈迦最尊第一と嘆給るなり
何ちる人も此を聞バ餘所小や見らるる本誓
の重願憑あり事を思へど歡喜胸よ滿渴仰肝
小銘とされむ罪ハ五逆謗法の重罪を遮一行い
一念も十念と攝取し給ふ依之在家出家持戒

破戒有智無智男女貴賤を簡ばされむ何小依
てり此願よとく者ありんや傳聞く彼釈の雄
俊ハ七度還俗の惡人たりし命終て後獄
卒闇魔の廳庭ふ引連ゆさ闇浮提第一の惡人
七度還俗の雄俊を連來り速小無間地獄ふ
隨ととくやと申られむ雄俊が云く口と在生の
時觀無量壽經と見しる五逆の罪人弥陀の名
号と十聲唱く極樂小生と説たり口と七度還

俗もくといふといふと五逆とば造らば善根少
 とつへとも念佛十聲ふ過一雄俊り阿鼻獄
 隨とて三世此諸佛妄語の罪ふ隨給ふべと
 高聲ふ叫びつぐ法王理よ折て玉の冠を傾き
 て此と拜給ひ弥陀に誓ふ依く蓮臺ふのせと
 來迎一給へつと況や七度還俗及くつんを
 況や一形念佛せんや如是理を以て思ふつと
 弥々本願を信受して一形憶念の称名相續せ

ん人の往生極樂に掌ふ把るが如く覺て喜べり嗚
 呼日月走が如く過く一生正小暮せんとして弥
 陀の本願在とづんば最後の近付といふ計心恐
 々ん然を平生より安堵のれもひをなす是
 ごとく計をき御恩ぞ如く況や無始以來叶ふ
 了はる出離解脱の望を遂るまおいてを我
 等罪惡深重なり鈍根無智カを願力不思議
 非ずんを何に依てり此一大事を成就せんや

縦骨を粉ても争てり佛恩を報謝せしむま唯
須く稱名して彼本願は順ずべし然るま今僅
は此理を思時と心に大に喜ぶ況や正しく來迎
は預て極樂は往生する時ハ何計の悦びやされ
む弥陀如來ハ諸の菩薩聖衆と前後左右は圍
遶せしめて紫雲小袖とせしむる一笙歌雲の上
小聞へ大悲觀世音ハ紫磨黄金の身と爛て金
蓮臺とせし給へハ勢至菩薩ハ百福莊嚴の御子

とのべし行者の頭を摩たせし大衆ハ悉く異口
同音行者とやのたまふ此時行者これと拜して
歡喜身の置處も覺へず即ち草菴小眼を閉じ
ハ速に蓮臺小蹤を結ぶ即ち弥陀佛の後に従ひ
菩薩聖衆の中ハ在る一念の頃の如し西方極
樂世界は往生とせしむる即ち彼國は入
終る自らの身を顧むる己小紫磨金色の膚
とせしりて體ハ自然の法衣あり鍔釧寶冠嚴

美く〜と耀く計あり時ふ観音勢至行
者の前よ來り〜大悲の御聲を出して種々
慰給ふ即ち菩薩小隨ひ〜漸處々を見めら
ハ金銀瑠璃の地も上よハ同き寶の宮殿あり七
寶百寶の塔婆あり千寶万寶の樓閣あり互
小照〜耀てハ樞と合せ〜立並べり金の扉と
排り〜沈檀の匂ひ馥く珠の簾と卷上よハ瓔
珞の光新〜中ふと殊ふ妙ち〜ハ上品蓮臺の

曉の樂と〜けむ心と澄り〜庭中の歌舞の
袖〜ふ心と悦び〜又寶池の方と見渡せ
ハ衆色の蓮華ハ自らその色々々光を放ち今と
盛と咲亂れ〜汀の方と詠と〜ハ鳧雁鴛鴦
群て居て翹と刷ひ妙なる法と鳴連たり其聲
哀宛雅亮〜て殊よ心と催せりハ功德水ま
波の音常樂我淨の法と説七重寶樹の風ハ
音伎樂歌詠の調あり即ち寶樹の花美〜

上三行 寶樹の花美〜 四一三

開々々々 芥と風小亂し 影と池水は浮きなり
 刺天の曼陀羅華は雪の如く小亂と散り 金銀瑠
 璃の地比上は錦を敷く 如くちり此とくふも
 珍しく彼を聞と心勇ましく 即ち大寶宮殿の詣
 つ始り 弥陀世尊を拜したてもらふは 八万四千
 の相好新なりて 金山王の如く 丹花の脣は愛
 敬の相とありて 青蓮の瞬は慈悲心比色と備へ給
 たり 即ち遙は 往生せらるるも 喜び給むて 忝

々々と御膝近く召し給ひて 金色の御手と
 伸給むる 行者の頭をちぎりの給りて 汝も極
 樂と彼三界と何がまると問ひ給へば 鬼角
 のつへそく 佛恩のうへに けさるる小餘り掌と
 合泪ふむせびぐく 御返事も申急とて 云う誠よ
 其時曠劫流轉の程を顧むば 三界六道の苦
 思ひ出ると 神と消とぐりたり 中心も昔十
 王の廳は禁らるる 呵責の語とて 申訳ふ舌と

卷一悲^{あはれ}今^{いま}ハ弥陀^{やいた}の寶前^{たからまへ}小跪^{こひざま}づくと親^{おや}ヲ憐^{あはれ}
 愍^{あはれ}の語^{ことば}を蒙^{あま}りて歡喜^{くわんぎ}身^みよ餘^{あま}る喜^{よろこ}ひを今^{いま}情^{なさけ}
 思^{おも}ひ比^ひふらふ何計^{なにづから}の違^{ちがひ}ぞや况^{いづ}や又^{また}六通^{むつと}自在^{じざい}
 の身^みとわれを二界^{にがい}六道^{むだう}小還^{せうげん}來^らして生^{なま}るの父^{ちち}
 母^{はは}まもも濟^{いそ}り世^よ々の恩^{おん}所^{しよ}を引^ひ導^{だう}して互^{たがひ}小^{せう}
 安^{あん}養^{やう}の淨土^{じやうど}よ迎^{むか}へて同^{おな}く玉^{たま}の床^{とこ}よ遊^{あそ}び或^{ある}ハ
 縮^{くちん}絃^{げん}歌^か舞^ぶの遊^{あそ}びを始^はて遊^{あそ}戯^ぎ快^{かい}樂^{らく}して自^じ在^{ざい}无^む
 導^{だう}けりんらて是^{これ}豈^{あや}本^{ほん}願^{がん}力^{りき}の大^{だい}恩^{おん}不^ふ非^ひどや

誠^{まこと}小^{せう}往^{わう}生^{じやう}極^{ごく}樂^{らく}の正^{しやう}因^{いん}ハ弥陀^{やいた}の本^{ほん}願^{がん}を憶^{おぼ}念^{ねん}し
 て名^な号^{ごう}と唱^{なま}えりて以^もて本^{ほん}と一^{いつ}飲^{いん}淨^{じやう}厭^{えん}穢^{たい}の媒^{ばい}
 小^{せう}此^{この}抄^{しやう}と先^{まへ}とて一^{いつ}心^{しん}眼^{がん}よ當^{あて}耳^{みみ}小^{せう}觸^{しよく}せん
 後^{のち}二^に心^{しん}と恣^しふせと云^い爾^に

主此所望も黙止しつゝはなふらうて私の見聞
を注とと云ふは意も随もて予が筆と採る
の志はあつて亦見者として彼集とも披
閲せしめて集主の本意も達せしめんが為
ありとつゝのしとて

于時嘉永三庚戌仲春日 龍谷釋徹外和南

六田南佛學書齋調護所

法文館 澤田友五郎

京都府平民
京都市五條通高倉東へ
塩竈町第三番戸

